

## 題名：国際協力と日本の伝統工芸品のコラボ

日本には東京の江戸切子や石川県輪島市の輪島塗、京都の西陣織をはじめ地域に根ざした伝統工芸品が数多く存在しており、それとともに古くからそれらを造る職人の巧みな伝統技術がある。職人の数こそ年々減少しているのが問題となっているものの、その高い技術力はまさに日本の誇りである。そのような日本に古来より伝わる独自の技術が国際協力とコラボする、というのは一見困難で想像もつかないかもしれないので、これから実例を交えながら説明していきたい。

私が現在住んでいる愛媛県松山市から車で約1時間北東へ行くと、120年の長い歴史を持つ伝統工芸品“今治タオル”の名産地、今治市がある。そこにある多くの今治タオル屋さんの一つに、株式会社丹後という会社がある。そこではウガンダ産のオーガニックコットンを100%使用したタオルを製造・販売している。実は、日本で紡績される糸の原料となる綿はほとんど全て輸入に頼っている。世界の綿生産量は上位から中国・アメリカ・インド・パキスタン・ウズベキスタンであり、この5か国で世界生産量の約70%を占めるという。株式会社丹後はウガンダコットンの希少性（オーガニックコットンは全生産量の0.7%）と、手摘み収穫によって残る綿本来の柔らかさを評価してウガンダ産のコットンを使用しているのだ。ウガンダのコットンだけではなく、その他の発展途上国それぞれにも高品質な産品はあるはずである。そういった質の高い原料を発展途上国からフェアな価格で仕入れ、日本の巧みな技術で伝統工芸品に加工するのが私の考える「国際協力と日本の伝統工芸品のコラボ」である。

ここで、なぜ伝統工芸品にこだわるのかということとその理由は大きく2つある。1つ目は比較的高価であることである。伝統工芸品は職人の手によってつくられるため必然的に少量生産になり、大きな価格競争に巻き込まれることがない。また、職人の技術を評価し保護するといった面からも伝統工芸品は高い値段で取引されるため、十分な利益を継続的に得ることができる。2つ目は宣伝効果である。地域に根付いた工芸品が異国のものとコラボしたとなれば（その意外性は言うまでもなく）、まず地域の住民に発展途上国について知ってもらえる機会となる。伝統工芸品は贈答用としても非常に人気があるため、プレゼントやお土産としてもらった人にも宣伝でき、口コミにも期待ができるはずだ。原料として用いられる発展途上国の産品が認知され評価されれば、将来的には取引量も増えブランディングにつながることも可能だ。

一方で、原料としてではなく原料を現地で加工した商品として輸入した方が現地の利益になるのでは、という意見もあるだろう。確かに生産地で加工した商品の方が付加価値も高くなる上に雇用も生まれ、発展途上国の利益につながりやすいのかもしれないが、伝統工芸品の場合、実際その設備を準備すること、何より日本の職人技を現地人に短時間でレ

クチャー・修得させることはそう簡単なことではない。それならば、確かな技術をもつ日本で加工した方が、全体の取引量が増加し、生産国の利益につながるのではないかと私は考える。

発展途上国内の情報は少ないかもしれないが、陽の目を見ていない高品質なものがまだまだ存在しているはずである。そういったものの中から日本の伝統工芸品とうまくマッチするものを見つけて橋渡しをしていくことができれば、発展途上国の支援につながることはもちろん伝統工芸品業界にも新しい風が吹き盛り立てていけるのではないかと期待する。日本の伝統工芸品を通じて、発展途上国と日本が互いに足りないものを補い合い、共に歩んでいけることが私の理想である。